

GIRLFRIEND

written by HADEYA

STOROBO FLASH

連中が俺を脅迫している。最愛の女性———シュシュ・メニテキストのコメカミに銃口を突き付けながら。要求は神の座を捨てて、別れろ。要求を呑めば、世界は滅ぶ。最愛の女性を救うか世界を救うか。俺は……最愛の女性を選んだ。過ちであると分かっているながら。それが自分の美学に反すると知りながら。

「ヘルに堕ちる。但し保証して欲しい。彼女の幸せ、を」

「勿論、そのつもりだ。保証する」

俺は最後の一言をシュシュに告げた。

「シュシュ、何も言わなくていい。俺を選んだ、俺の選択だ。沈黙は作戦決行のゴーサインと受け取る」

「……」

「愛してる」

それだけ告げて、ヘルに向かった。

ヘル———焼け野原。灼熱の大地を素足で歩く。歩きながら状況を見極める。俺がすべきはシュシュの永遠の安全の確認。その為に出来る事は、

連中を皆殺しにする事。

後から知った事だが、連中はシュシュにロボットミ手術を施した。シュシュは身体が不自由になった。

連中を殺す。片っ端からブツ殺す。契約違反の代償は重かった。余りにも重かった。俺は我を見失った。後にも先にも俺が暴走し、自分自身を裏切った唯一の瞬間だった。

さらば、シュシュ。俺たちの掛け替えのない日々は戻らない。俺は……修羅と化した。

FLAT LINE

走る。一般道を。オープン・カーで。季節は春。夜風がヒンヤリ心地良い。
カーラジオから流れるのは最新のクラブ・ミュージック。四つ打ちのビートでBPMは少し速め。
如何にも、と言ったサウンド。どうでも良い話だが。

赤信号で止まった。使い捨てライターでタバコを点火する。特殊ルートで入手した特殊なタバコを。
私はこのタバコが気に入っている。プライベートはキメまくりながらドライブに繰り出す。
今日はどんな男と出会うだろう。ハンドルを握りながら淡い期待を抱く。

唐突にカーラジオからプレイキング・ニュースが流れた。ニュースはあるロックスターの自殺を報じていた。人気絶頂のバンドのリーダーでショットガンで自殺した、との事だった。ショックを受けた。私が最もイケてると思っていた男だったからだ。

彼は音楽シーンを変えた。最高の声に最高のコード進行、最高のディストーション。演奏後は派手に楽器をブツ壊し、ファンに媚びる事なく、誰よりイケている。

きっとモテモテだったに違いない、だが孤独だったのだろう。そんな自分をぶっ壊したくなる。
気持ちは分かる。痛いくらい分かる。プロとして厳しい制約に生きる私にも、そんな時があるからだ。
そう言った時、私は夜風に当たる。ナイトクラブへ繰り出し、男に口説かれる。
大抵は下らない男だが、たまにイケてる男が引っ掛かる。今、みたく。

信号が青に変わった。CDを変え、喪に服する。彼のサウンドで最も好きな曲〈BREED〉のラフ・ミックスを。
このミックスが最も心地良い。デモ音源にこそ彼のスピリットが宿る。

クラクションが鳴った。下等生物が汚い言葉で私を罵っている。世界を汚す者たち。自らの哲学を見出せない、その日暮らしの労働者たち。
私はそう言った連中とは距離を置く事にしている。

愛車を走らせた。ヤクが効き、楽曲がサビに向かって突き進む。夜風を浴び、彼に共感する。彼の声を聴くと胸、熱くなる。

夜の一般道を走る。ナイトクラブへ向け。ブツぎりの速度で切ない別れを突き抜けるべく。
その姿は神々しく、余りにも切ない。その切なさが自分を高める。誰よりも切なく、誰からも理解されない。
だからこそギアをトップに入れ、男を捕らえる。素早く、的確に、確実に。それこそが美しさの秘訣であり、私が選んだ人生の選択。
それしか私は生き方を知らないのだ。美の恍惚、それは排他的であり、否定的だ。屈強でいて、誰よりも繊細。

小雨が降って来た。あたかも私の心が涙を流すように。夜空に煌めくインスピレーション。それは完全に私の心と同化している。

雷鳴が轟いた。アクセルを踏んだ。私は自分が〈美〉である事を否定できなかった。完全無欠の美である事を。

私の言う事が理解できないなら、貴方は嘘を吐いてる。

5th SEASON

彼女は笑顔だ。俺はスマイル・ジャンキー。朝、寝て、夜、起きる。反復で日常が過ぎて行く。結論から言えば、またもしくじった。いつになったら学ぶんだろうな。いつになっても学ばねえのさ。多分な。酒をかつ喰らって日常に戻って行く。終わりなき闇へ。

*

悪魔は言った。ピストルを手に。

「お前、何も分かっちゃいねえな」

そうとも俺は何も分かっちゃいない。本当は分かってるけど、受け入れる訳には行かねえんだ。俺の美学に反するからな。

妥協したい。けど出来ない自分がある。すれば、楽なんだろう。けど出来ない。出来ないモノは出来ないんだ。

「ならよ。お前の女は俺のモノだぜ」

俺は答えた。迷った挙句。

「だろうな。最初から分かってたさ。それでも信じたい自分がある。ギャンブルしたくて、ウズウズしている自分があるんだ。否定できないだろうよ」

「死ねや」

悪魔がピストルを向けた。スローモーションでユックリと。銃口と目が合う。年貢の納め時——毎回、そう思う。けど、そうはならない事も知っている。

パン！ 乾いた銃声が轟いた。俺は……トリガーを引いていた。奴より速く。悪魔より速く。

「お前……」

立ち上がり、悪魔の前に立った。野郎を見下ろし、銃口を向ける。

「一つアドバイスしてやるよ」

言うなりトリガーを引いた。弾倉が空になるまでトリガーを引き続けた。

空虚——その向こうにあるもの。いつの日か俺は掴む。掴んで見せる。そして俺は突き抜ける。己に課した禁則から。

落ちてるマシンガンを拾い、上空へブツ放した。空は明るくなり始めていた。今日も新しい一日が始まった。

MONDAY AGAIN

ピストルを向ける——最愛の彼女に。俺なりに考えた結論だ。この先、俺たちがどうなるか分からない。今は舞い上がっているが。

俺は嘘を吐いた。吐き過ぎた。結果として君を撃つ羽目になった。

誰にも出会えない俺。誰からも愛されない俺。それでも、いつの日か出会えると信じている。そして知るのだと思う。自分の本当の正体を。

「撃ってもいい。けど約束して、撃つなら私の目を見て撃つ、と」

彼女は告げた。挑発的に。迷わず、トリガーを引いた。鮮血を散らしながら彼女が倒れる。倒れた彼女に、もう一発、撃った。もう一発、もう一発。

俺はイナズマを取り戻した。

HOLD ME TIGHT

彼女が求める——俺を。死ぬほど激しく。

降りしきる雨の中、彼女は俺をアスファルトの壁に押し付けた。唇を激しく奪われる。

「ゼルダ——」

きっぱりと告げた。俺と付き合っ欲しい、と。それからナイトクラブを出て、外の空気を吸った。今に至る。

ゼルダ・レゼンド。天文学的に低い確率から生まれた絶世の美女。美の女神にして、俺の女。

紆余苦節を経て、俺たちは結ばれた。

彼女は言った。セックスが友情を台無しにする、と。その通りかも知れない。

そして今、俺たちは路地裏で一発、キメようとしている。複雑な心境だった。

「欲しいの……ハデヤ。強烈なのが欲しいの……」

俺はキスを中断した。

「出来ない……俺には出来ない。君を失うなんて……」

「そんな事、言わないで。私は貴方を愛してるの。全身が貴方を求めている。ハデヤの全てを——」

突然、俺はゼルダに背を向け、突っ走った。降りしきる雨の中、全力で駆けて行く。

支離滅裂な行動。完全意味不明。それでも俺は突っ走った。雨の路地裏を。

最愛の女性を失った。それでも俺は満たされている。

偽りの愛に染まるくらいなら何も得ない道を俺は選ぶ。

ある小説のキャッチフレーズが頭を過った。

空虚でも明日がなくてもいい。溢れる想いと漲るロマン——それが生き甲斐だ。

雷鳴が轟いた。真っ赤なイナズマが孤独をズタズタに引き裂く。

俺は走った。走り続けた。雨の路地裏を。

……どうか自分勝手な俺を許して欲しい。ナルシスティックな俺を嘲笑って欲しい。

夜。無人のストリートを俺は誰よりも速く駆け抜けた。これがイナズマの生き様。俺は——

——自分を信じていた。(ア)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872